産業考古学館（仮称）に関連する博物館の比較研究

［平成 14 年度学長特別研究費研究報告］

A Comparative Study of Museum related to the University-Museum of Industrial Archaeology (a tentative name)

渡邊　章亙
デザイン学部空間造形学科
Akinobu WATANABE
Faculty of Design
Department of Space and Architecture

伊坂　正人
デザイン学部生産造形学科
Masato ISAKA
Faculty of Design
Department of Industrial Design

佐々木崇暉
文化政策学部文化政策学科
Shuki SASAKI
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of Regional Cultural Policy and Management

種田　　明
文化政策学部文化政策学科
Akira OITA
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of Regional Cultural Policy and Management

本研究は、本学付属の産業史博物館（仮称『産業考古学館』）創設にあたって、浜松エリアにおける文化財のアイテム発掘に関する基礎調査としてすすめられてきた。

今回の調査研究報告は、産業の発展に大きく寄与したと考えられる静岡県下の『軽便鉄道』の歴史的全体像を把握することにした。かつて、浜松エリアには、街の中心部より 3 路線の軽便鉄道が市の周辺に運行されていた。現在運行されているのは遠鉄鹿島線だけであり、奥山線は一部の土木構造物が史蹟として残され、中ノ町線は開発の波の中に完全に消え去ろうとしている。（資料：静岡県の鉄道の歴史、を添付した。）

1996 年（平成 8 年）、文化財保護法が改正され、新たに『登録文化財制度』の導入と重要文化財に『土木構造物』が認められることになった。このことは、消え去りつつある軽便鉄道の記憶を文化として、また、地域の生涯教育の一項目に加えることができるようになり、わが国の文化行政上、大変意義深い。（大学付属博物館一覧：2002 年 1 月現在、を付表とした。）

This report shows, in the first place, a short history of light railways in Shizuoka Prefecture, which contributed much to modern industrial developments and would be an exhibition-item of the planed museum. Secondly it handles the new entry-system of national cultural assets for the Industrial Heritage (structures of civil engineering; a partial amendment of the Cultural Assets Protection Law, 1996) and university-museums in Japan(the status quo of January 2002).

Ⅰ－１　研究の概要

（渡邊・伊坂・佐々木・種田）

研究の概要は以下のとおりであった：

（研究の目的）平成 18（2006）年度開館を予定している大学付属博物館「産業考古学館（仮称）」の、展示・収集内容（物、情報）の調査・研究・収集（搬入／運搬／保管）に着手し、同館の充実を図る。

（実施内容）静岡県内の産業遺産調査（文化庁「近代化遺産悉皆調査」を基礎とする）・中部産業遺産研究会（および日本建築学会中部支部の）近代建築調査・現在※のコンサルタントからの情報などに基づき、人物取材・工場見学・実物点検・文献調査・比較研究を加え総括専門部会（産業考古学館（仮称）整備基本計画検討委員会の内）の合意を得られれば収集（購入）する。

（※平成 14（2002）年 1 月）

（期待される成果等）生涯学習の振興に関する諸法が平成 2（1990）年度から次々と発効し、大学博物館はその最も有力な機能を持つ機関として注目を集めはじめている（国公立大学の総合博物館建設※※）。本学博物館は世界初の大学産業史博物館「産業考古学館（仮称）」を目指しており、その完成は研究教育のみならず学術・学生交流、まちづくり、地域社会への還元（上記「生涯学習」の場）、産業振興などに多大な貢献を果たすものである。本研究は開館を予定している本学付属博物館活動の事前作業となるとともに開館以降の館活動につながることが期待できる。

（※※種田明「大学博物館・“産業考古学館”（仮称）の設立」（『静岡文化芸術大学研究紀要』Vol.1/2001, pp.37-40）を参照）

Ⅰ－２　共同研究者と共同研究の分担内容：

空間造形学科　渡邊　章亙
　建築史・デザインからの調査・研究と分析・評価

生産造形学科　伊坂　正人
　研究の統括（サブ）、展示マネジメントからの、博物館とまちづくりの研究

文化政策学科　佐々木崇暉
　地域史・経済史からの調査・研究と分析・評価

文化政策学科　種田　明
　研究の統括、産業考古学調査・研究、海外博物館との比較研究

Ⅱ－１　研究報告（1）：近代産業遺産としての静岡県の「軽便鉄道」（渡邊）

○地域産業発展における軽便鉄道の役割

明治維新以来、「殖産興業」を旗印に行った西洋先進国に追いつくための工業化は、日本の大都市だけで果たされた改革ではなく、全国各地で一斉に行われた改革であった。その明治の産業育成にあたっては、国家の力だけではなく多くの地方の資産家が自らの財力を投資した多くの事業があった。そうした地域産業の一つに、各地で建設された民間自力建設の「軽便鉄道」に代表される地方鉄道を上げる事ができる。

軽便鉄道をはじめとする地方の鉄道が、地域の産業発展と生活の基盤に大きな影響を与えてきた。各地方の鉄道が産業を発展させ、その産業がその地域の生活文化を大きく変化させてきた側面を、産業考古学の研究対象の一部とする事を提案したい。

鉄道は、都市のインフラとしての路線そのものや橋梁・トンネルなどの土木構築物、駅舎や修理工場などの建造物、車両などの機械設備、鉄道運行などの諸道具等幅ひろいテーマがある。道具関係は鉄道マニアがコレクションとして収集されているものもあるが、それ以外のものは性格上保存する事が難しく、社会的に役に立たなくなったものはほとんどが作り直されるか放置されて消えかかっている。

○軽便鉄道とは

軽便鉄道とは、幹線の鉄道建設の水準より簡便で、線路の巾を狭くし、小型車両を用いた文字通り軽便な鉄道の事である。

明治の産業国家を目指した殖産興業は、運輸ネットワークと交通機関の革新が必要であった。当時の日本には、車輪を付けた車両がスムーズに通行できるような道路は少なく、陸上輸送において物資輸送のネックとなっていた。そうした時代において、明治５年に開設された鉄道は画期的な交通機関として急速に評価されるようになり、各地から鉄道建設の要請が政府に寄せられた。しかし、政府としては全国の幹線鉄道網を完成させることが先決で、幹線の枝となる地方の鉄道までは手が回らなかった。

そうした状況を打開するにあたって、政府は鉄道を３種類に分けて整備するようになった。一つは国土縦貫の幹線や地方の主要連絡鉄道。二つ目は大都市内の輸送をになう市内鉄道。そして地域の開発を目的とする「軽便鉄道」であった。

明治43年、民間資本で簡単に設置できる「軽便鉄道法」が公布された。全文で八条と二つの付則のみという法律自身も簡便なものであった。この法律によって全国に軽便鉄道ブームが起こった。

○静岡県の軽便鉄道

静岡県は、東海道本線の三分の一にあたる194 km を有する産業発展の条件に恵まれた地域である。しかし、東海道本線建設における最大のねらいは、東京と大阪をむすぶ国家的な動脈を形成する事で、沿線開発を狙ったものではなかった。地方の産業育成のための必要条件は提供したが、地域の産業発展のための十分な条件ではなかった。そのために、産業が現実的に発展するための物資や労働力を輸送するための交通機関は、地方の有志が自ら企画し、多くの財力を出資して建設された人車鉄道、馬車鉄道、軽便鉄道が担う事になった。

静岡県内の最初の民間鉄道は「富士馬車鉄道」であった。明治22年、東海道本線が全通し、岳南地方の東海道線の駅は田んぼの中に鈴川停車場（現在の吉原駅）として設けられた。本来ならば、吉原宿に設けられるべき停車場が田んぼの中に設置されたのは、地元の馬、籠などの貨物輸送の利権を持った人たちの反対があったためだけでなく、鉄道省の判断で災害を考慮したためだと言う。

当時、内陸部の入山瀬に建設された「富士製紙」は、東海道線鈴川停留所までの製品輸送のためには新しい交通機関が必要であった。明治23年、富士製紙と地元の豪農、高瀬荘太郎、池谷佐平などの有志は、鈴川と入山瀬４km 間に馬車鉄道を敷設した。

鈴川停留所から吉原宿までは巾９m の東海道の道路上に軌道巾60.6 cm 、12ポンド（6kg／m）のレールを敷き、吉原宿から入山瀬の間は通行人の邪魔にならないように県道の中央から片側に寄せて建設された。その上を定員１３人ぐらいの箱型客車や貨物用トロッコを馬が引いていた。その後、この富士馬車鉄道は、社会発展の波の中で時代遅れとなり大正14年には廃線となっている。

静岡県には、この「富士馬車鉄道」をはじめとして、30を超える地方鉄道（後出資料参照）が造られた。「軽便鉄道」に代表される地方鉄道は、東海道の各地域の発展に大いに貢献し、今日でも遠鉄西鹿島線、伊豆箱根鉄道、伊豆急行、大井川鉄道など利用されているものもある。だが、大半はその後順次整備された道路網とバス・トラック便によってその姿が消え、その存在も知られないうちに歴史の中に埋もれつつある。そうした交通機関を利用した人々も少なくなってきている。

○地域産業発展における軽便鉄道の歴史的情報保存

軽便鉄道は、地域の人と物を快適に効率よく運搬することがねらいで設営されたものであった。しかし、文明の発達は更に小回りの利くバスとトラックによって代わられ、産業優先の時代においては効率だけで評価され、全国に数多く建設された軽便鉄道や路面電車はその多くが姿を消して来た。

今日では古を懐かしむ対象として鉄道マニヤによって多くの資料が収集され、生き残っている鉄道は観光事業の一環として再び脚光を浴びつつある。又、自動車文明の行き詰まりに対し、パークアンドライド方式の交通システムの一環である Light Train として復元されるものも出てきている。

こうした軽便鉄道の歴史的な評価と保存は、残されている施設の産業史蹟としての保存だけでなく、利用者のもっている写真や聞き取り情報が重要な研究素材となる。いま、そうした情報を体系的に収集するために、郷土史研究者、鉄道マニア、そして沿線の利用者たちによる研究体制の設置が望まれる。かつての軽便鉄道を利用した事がある明治、大正生まれの人たちも少なくなってきた今日、こうした研究が生涯教育の一環としても社会的に価値あることであろう。

資料：静岡県の鉄道の歴史

第 1 期・幹線鉄道の建設

明治 05 ／ 1868：新橋～横浜鉄道開通

明治 20 ／私設鉄道法施行

明治 22 ／ 1889 東海道本線全通：新橋～神戸

明治 23 ／ 1890 ～ 1924 ①富士馬車鉄道：鈴川（吉原）～大宮・長沢～富士駅：17.3km

明治 29 ／ 1896 ～ 1923 ②豆相人車鉄道・熱海鉄道：熱海～小田原：25.0km

明治 31 ／ 1898 ～現存③豆相鉄道（駿豆鉄道）：標準：三島～伊豆長岡～大仁：19.8km

～ 1934 ③三島広小路～下土狩まで延長：1.4km

～ 1918 ④御殿場馬車軌道：御殿場～駕籠坂峠：17.4km

～ 1959 ⑤島田軌道：人車：島田駅～向谷：3.1km

明治 32 ／ 1899 ～ 1935 ⑥堀の内軌道運輸：馬車・軽便：菊川～池新田：14.8km

明治 35 ／ 1902 ～ 1962 ⑧秋葉馬車鉄道・静岡鉄道秋葉線：新袋井～遠州森：12.1km

明治 39 ／ 1906 ～ 1963 ⑨伊豆箱根鉄道軌道線：三島広小路～沼津駅前：5.9km

明治 40 ／ 1907：③豆相鉄道・伊豆鉄道改名

明治 41 ／ 1908 ～現存⑩静岡鉄道：静岡鉄道静岡清水線：鷹匠町～江尻新道：軽便：11.0km

～現存⑪浜松鉄道二俣線：板屋町～西鹿島：軽便：17.6km

明治 42 ／ 1909 ～ 1939 ①富士軌道：松山町～大宮停車場～上井出延長：18.8km

～ 1932 ⑫中泉軌道：人車：磐田～池田橋：5.8km、

～ 1937 ⑬浜松鉄道中ノ町線：軽便：遠州馬込～中ノ町：6.0km

第 2 期・軽便鉄道の整備

明治 43 ／ 1910：軽便鉄道法施行

明治 44 ／ 1911 ～ 1962 ⑧秋葉鉄道可睡線：可睡口～可睡：1.1km

～ 1970 ⑭中遠線：新袋井～新三俣

大正 02 ／ 1913：東海道線複線化

大正 02 ／ 1913 ～現存⑮富士身延鉄道：標準：富士～大宮

～ 1919 ⑯庵原軌道：軽便：辻村～庵原：5.5km

～ 1970 ⑰藤相鉄道：軽便：駿河岡部～藤枝～相良～袋井：69.4km

大正 03 ／ 1914 ～ 1964 ⑱浜松鉄道奥山線：軽便：元城～金指

～ 1944 ⑲浜松鉄道笠井線：軽便：西ケ崎～笠井：2.3km

大正 04 ／ 1916 ～ 1984 ⑳清水港線（臨海線）貨物専用：標準

～ 1931㉑ 安部鉄道：軽便：井の宮～牛妻：9.4km
大正 07 ／ 1918 ～ 1943㉒ 南豆馬車鉄道：大沢～下田：4.2km
～ 1949 ⑩静岡電気鉄道静岡清水線：標準：新清水～波止場：1.1km
：④ 御殿場馬車軌道廃線：御殿場～駕籠坂峠：17.4km（1898 ～）
大正 08 ／ 1919：⑯ 庵原軽便鉄道廃線：辻村～庵原：5.5km（1913 ～）

第３期・軽便鉄道の機能向上（電化・改軌）と淘汰

大正 09 ／ 1920：鉄道省設置
：⑩静岡鉄道清水線改軌・電化
：⑮富士身延鉄道：富士～身延開通
大正 10 ／ 1921：③駿豆鉄道修善寺線電化
㉖大正 11 年／ 1922 ～ 1962㉓静岡鉄道市内電車駅前線：鷹匠～静岡駅：1 km
大正 12 ／ 1923：関東大震災
：② 豆相熱海人車鉄道廃線：熱海～小田原：25.0km（1896 ～）
：⑪浜松電気鉄道二俣線改軌・電化
：⑱奥山線全線開通：板屋町～奥山：25.7km
㉗大正 13 ／ 1924 ～ 1937㉔西遠鉄道：軽便：貴布禰～宮口：4.2km
：⑧静岡鉄道秋葉線電化
：① 富士馬車鉄道廃線：鈴川～大宮：17.3km（1890 ～）
：③伊豆箱根鉄道：修善寺線：大仁～修善寺延長
大正 14 ／ 1925：㉓静岡市内電車鷹匠～安西延長
昭和 02 ／ 1927：⑮富士～身延間電化
昭和 03 ／ 1928 ～現存 ㉖大井川鉄道：標準：金谷～千頭：44.3km
～ 1975㉗静岡鉄道清水市内線：標準：港橋～清水駅～横砂：4.6km
～ 1936㉘光明電気鉄道：標準：磐田駅～二俣町：19.8km
：⑮身延～甲府間開通
昭和 06 ／ 1931 ～現存 ㉙寸又川森林軌道：井川線：軽便：千頭～井川：25.5km
：㉖大井川鉄道・千頭全通
：㉑ 安部鉄道廃線：井の宮～牛妻：9.4km（1916 ～）
昭和 07 ／ 1932：⑫ 中泉軌道廃線人車：磐田～池田橋：5.8km（1909 ～）
昭和 09 ／ 1934：丹那トンネル開通
：③ 駿豆鉄道一部廃線：下土狩～三島広小路：1.4km（1898 ～）

第４期・バス運行と軽便鉄道の衰退

昭和 10 ／ 1935 ～現存 ㉚国鉄二俣線：掛川～遠州森町／天竜浜名湖鉄道
：㉘ 光明電鉄廃線：磐田駅～二俣町：19.8km（1928 ～）
：⑥ 堀の内軌道廃線：菊川～池新田：14.8km（1899 ～）
昭和 12 ／ 1937：⑬ 浜松電気鉄道中之町線廃線：遠州馬込～中ノ町：6.0km（1909 ～）
：㉔ 西遠鉄道宮口線廃線：貴布禰～宮口：4.2km（1924 ～）
昭和 13 ／ 1938 ～現存 ㉛国鉄伊東線：熱海～伊東
昭和 14 ／ 1939：① 富士軌道：松山町～大宮停車場～上井出延長：18.8km（1909 ～）
昭和 15 ／ 1940：㉚二俣線全通：掛川～新所原
昭和 16 ／ 1941：⑮身延線国鉄移管：富士～甲府：88.1km
昭和 18 ／ 1943：㉒ 南伊豆馬車鉄道廃線：大沢～下田：4.2km（1918 ～）
昭和 19 ／ 1944 ～ 1981 ⑳：清水港線：標準：清水～三保：8.3km
：⑲ 浜松電気鉄道笠井線廃線：西ケ崎～笠井：2.3km（1914 ～）

第５期・大量高速輸送

昭和 23 ／ 1948 ～ 1970：⑭⑰中遠線と藤相線ドッキング：駿遠線：60．7km

昭和31／1956：東海道線全線電化
昭和34／1959：⑤ 島田軌道廃線：島田駅～向谷：3.1km（1898～）
昭和32／1961：駿豆鉄道・伊豆箱根鉄道駿豆線に改名
昭和36／1961～現存：㉜伊豆急行下田線：標準：下田～伊東：：46.0km
昭和37／1962：⑧ 秋葉線廃線：新袋井～遠州森：12.1km（1902～）
：㉒ 静岡市内電車廃線：鷹匠～静岡駅：1km（1922～）
昭和38／1963：⑨ 伊豆箱根鉄道軌道線廃線：三島広小路～沼津駅：5.9km（1906～）
昭和39／1964：東海道新幹線開通
：⑱ 奥山線廃線：板屋町～奥山：（1923～）
昭和45／1970：⑭⑰ 駿遠線廃線：藤枝～袋井：60．7km（1911～）
昭和50／1975：㉗ 静岡鉄道清水市内線：標準：港橋～清水駅～横砂：4.6km（1928～）
昭和56／1981：㉜ 清水港線廃線：清水～三保：8.3km（1944～）

富士馬車鉄道から伊豆急下田線までに開通した路線　合計32路線
廃線となった路線　23
現存している路線　9

（参考文献）
静岡県「鉄道物語」：静岡新聞社・1981
全国軽便鉄道　岡本憲之：JTB・1999
地形図でたどる鉄道史　今尾恵介：JTB・2000
鉄道廃線跡を歩くⅢ　宮脇俊三：JTB・1997
鉄道廃線跡を歩くⅧ　宮脇俊三：JTB・2001
近代化の旗手、鉄道　堤　一郎：山川出版・2001
遠江22、23、24、25号：浜松史蹟調査顕彰会・1999、2000、2001，2002
懐かしの軽便鉄道：ひくま出版・1979
静岡県の近代化遺産：静岡県教育委員会・2000
生活文化を継承する歴史的建造物研究②：平成13年度特別研究

Ⅱ－2　研究報告（2）：産業遺産（登録文化財）・大学博物館に関する近年の動向（種田）

○産業遺産に関する動向：登録文化財

平成8（1996）年、文化財保護法が改正され、新たに「登録文化財」制度が導入されたこと、および重要文化財の定義の中に「土木構造物」が明文化されたこと[1]は、わが国の文化財行政（調査研究・保存・活用・広報その他）にとってたいへん画期的なことであった。

もちろん、まだ欧米に10年以上遅れている、あるいはもっと早く法改正できなかったかという声もある。後者は、とくに前年（1995）の阪神淡路大震災被災地からのものである。被災した多くの文化財は、「記録」の不備・「専門の職人・技能者」の不足・「財政難」などのために復元修復できず、関係者は破壊消滅を座視するのみであったからである。

文化財の現状を見てみよう。文化庁による[2]文化財指定等の件数は以下である：

文化財指定等の件数（平成15年5月1日現在）
［指定］1．国宝・重要文化財

種別／区分		国宝	重文
美術工芸品	絵画	155	1,925
	彫刻	124	2,584
	工芸品	252	2,380
	書籍・典籍	222	1,841
	古文書	59	693
	考古資料	39	535
	歴史資料	1	118
	計	852	10,076
建造物		（255棟） 211	（3,784棟） 2,230
合　計		1,063	12,306

（注）重要文化財の件数は、国宝の件数を含む。

2．史跡名勝天然記念物・略
3．重要無形文化財

	各個認定		保存団体認定	
	指定件数	保持者数	指定件数	保持団体等数
	（件）	（人）	（件）	（団体）
芸能	36	52	11	11
工芸技術	47	54(53)	13	13
合計	83	106(105)	24	24

（注）（　）内は、実人数を示す。

4．重要有形民俗文化財　200
5．重要無形民俗文化財　219
［選定］1．重要伝統的建造物群保存地区
61 地区
2．選定保存技術

保持者		保存団体	
（件）	（人）	（件）	（団体）
46	49	22	24(22)

（注）保存団体には重複認定があり（　）内は実団体件数を示す。

［登録］〈詳細略〉
登録有形文化財　　3,292

平成15年現在、登録文化財は3,292件である。法改正当初（1996年）は、5年間で2,500件、最終的には10,000件を目標に作業を進めていくとされていた。実際、平成13（2001）年3月31日現在で2,471件（このうち：建物2,019、土木構造物128、その他324である）[3] となっていて、法改正の実効が大きかったことを示している。

バブル崩壊（1991．11）前後から、わが国の文化の環境は大きく変化し始めた。端的に言うと、お金では買えないものやいったん失われたなら二度と取り返せないものを次世代へ引継ぎ護っていこう、とする流れである。平成2（1990）年から始まった「近代化遺産総合調査」[4]、平成4（1992）年のユネスコ「世界遺産条約」批准を契機に、国や自治体の文化行政・施策も、これまでコツコツと積み上げられてきた各地の住民による景観保存運動、そして研究者・学会の価値評価・保存提言に接近し、両者の溝は着実に狭まってきている。

○大学博物館の動向

博物館（建設・設立）ブームも大局から観ると、文化環境の変化の中にある。しかし残念ながら、国・自治体レベルでは博物館行政に対する温度差が大きい。すなわち、博物館建設ブームの主体は私企業と産業振興・産業観光に熱心な自治体など[5] で、国や多くの自治体は30年前と変わらぬ『箱もの行政』の一環としてしかみていない。

大学博物館へのまなざしも『箱もの行政』なのであろうか。平成9（1997）年、当時学長予定者であった木村尚三郎（現）学長が提唱したのは、箱ものとしての博物館ではなかった。木村が提唱した博物館は、平成4（1992）年以降の18歳人口減少期に設立される「大学」には何が必要か、を考慮した「大学付属博物館」であった。大学付属博物館「産業考古学館（仮称）」の、大学博物館としての位置付けと設立意図については、すでに2000（平成12）年に国際会議で報告している。[6]

日本の大学博物館に関しては、『季刊ミュージアム・データ』No.56（2002.3）（ISSN1346-5155：丹青研究所発行）が、優れた現状把握を提供している。すなわち、論説：熊野正也（明治大学博物館事務長）「ユニバーシティー・ミュージアムのこれから ― 明治大学博物館の場合 ―」と「全国の大学・短期大学が設置している博物館園一覧表」（丹青研究所調べ、平成14年1月）の2つである。

前者で熊野は、日本の博物館の略史と明治大学博物館3館について概説した後、「大学博物館」の実績（考古学から始まり、現在3博物館で行なわれている地域・社会（人）への入門講座）や役割（「大学と学問への架け橋」としての）を論じる。そしてこれからの大学博物館は次の7点を拡充することを目指すと結んでいる：

○学芸員養成課程の実習室（館内実習の充実）、○文化財実験研究室（機器を整備し研究を充実）、○ミュージアム・ショップ（商品開発・図書販売）、○ギャラリー（特別展）
○大学博物館の職員、○博物館の研究と資料の収集、○博物館友の会の拡充、である。

後者（一覧表）から大学博物館の現状をみてみよう。農業・水産・獣医・薬科大学／学部学科では当たり前のものである動植物園／室、水族館を除いたものを以下に示す：

日本の 110 大学・短期大学附属博物館

館名（大学＋館名：所在地の北から南の順、〈→ No. ○○〉は同じ大学に所属＝番号重複（ 5 校））

1. 北海道大学総合博物館
   北海道大学附属図書館北方資料室
   北海道大学北方生物園フィールド科学センター水圏ステーション厚岸臨海実験所
   アイカップ自然史博物館
2. 北海道教育大学旭川分校史学資料室
3. 東京大学大学院人文社会系研究科付属常呂資料陳列館　〈→ No.32〉
4. 札幌大学埋蔵文化財展示室
5. 札幌学院大学考古学資料展示室
6. 札幌国際大学博物館
7. 北星学園創立百周年記念館（北星学園女子短期大学）
8. 岩手大学農学部付属農業教育資料館
9. 東北大学総合学術博物館〈東北大学には他に自然史標本館（理学部）がある〉
   東北大学史料館
   阿部次郎記念館
10. 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
11. 秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館
12. 秋田経済法科大学雪国民俗研究所附設雪国民俗資料館
13. 山形大学附属博物館
14. 福島県立医科大学附属展示館
15. 郡山開成学園日本風俗美術館（郡山女子大学）
16. 茨城大学五浦美術文化研究所天心記念館
17. 筑波大学附属図書館貴重書展示室
    朝永記念室（筑波大学）
18. 東京藝術大学美術館取手館　［取手市］　〈→ No.33〉
19. 足利工業大学総合研究センター「風と光の広場」
20. 國學院大學栃木学園参考館（國學院大學栃木短期大学）
21. 跡見学園女子大学花蹊記念資料館
22. 日本大学 80 年記念館　［さいたま市］　〈→ No.28〉
23. 日本工業大学工業技術博物館
24. 武蔵野音楽大学楽器博物館（入間校地）
25. 立正大学熊谷校舎考古学陳列室
26. 早稲田大学所沢校地文化財調査室展示室　〈→ No.58〉
27. 水田美術館（城西国際大学）
28. 日本大学歯学史資料室　［松戸市］
    日本大学芸術学部芸術資料館　［東京都練馬区］
    〈日本大学には他に、資料館（生物資源科学部：藤沢市）がある。→ No.22〉
29. 和洋女子大学文化資料館
30. お茶の水女子歴史資料室（お茶の水女子大学）
31. 電気通信大学歴史資料館
32. 東京大学総合研究博物館　〈→ No.3〉
    東京大学総合研究博物館小石川分館
    東京大学教養学部美術博物館
    東京大学医科学研究所近代医科学記念館
33. 東京藝術大学大学美術館　〈→ No.18〉

34．東京商船大学百周年記念資料館
35．東京水産大学水産資料館
36．東京農工大学工学部附属繊維博物館
37．青山学院資料センター（青山学院大学）
38．上野学園日本音楽資料室（上野学園大学）
39．学習院大学史料館
40．国立音楽大学楽器学資料館
41．國學院大學考古学資料館　〈國學院大學系列校：→No.20〉
　　國學院大學神道資料館
42．国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館
43．昭和女子大学光葉博物館
44．杉野学園衣裳博物館（杉野服飾大学）
45．玉川大学教育博物館
46．多摩美術大学美術館
47．東京家政大学生活資料館
48．東京家政学院生活文化博物館（東京家政学院大学）
49．純心ギャラリー（東京純心女子大学）
50．東京女子医科大学資料室吉岡弥生記念室
51．東京農業大学醸造博物館
　　東京農業大学農業資料室
52．東京理科大学近代科学資料館
53．日本女子大学成瀬記念館
54．武蔵野音楽大学楽器博物館（江古田校地）
55．武蔵野美術大学美術資料図書館
56．明治大学刑事博物館
　　明治大学考古学博物館
　　明治大学商品陳列館
57．明治薬科大学明薬資料館
58．早稲田大学會津八一記念博物館　〈→No.26〉
　　早稲田大学坪内博士記念演劇博物館
59．女子美術大学美術資料館
　　女子美アートミュージアム（女子美術大学）
60．フェリス女学院資料室（フェリス女学院大学）
61．新潟大学あさひまち展示館
62．日本歯科大学新潟歯学部の博物館
63．富山医科薬科大学和漢薬研究所民族薬物資料館
64．金沢大学資料館
65．山梨大学水晶館　《教育人間科学部構内》
66．信州大学教育学部志賀自然教育研究施設
67．松商学園短期大学コンピュータ博物館
68．岐阜大学教育学部郷土博物館
69．高山短期大学飛騨自然博物館
70．東海大学海洋科学博物館
　　東海大学自然史博物館
71．名古屋大学博物館
72．愛知県立芸術大学芸術資料館

愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画模写展示館
73．南山大学人類学博物館
74．皇學館大學・神道博物館
75．滋賀大学経済学部附属史料館
76．京都大学総合博物館
京都大学文学部心理学古典機器博物館
京都大学大学院農学研究科附属水産実験所水産生物標本館
77．京都工芸繊維大学美術工芸資料館
78．京都市立芸術大学芸術資料館
79．京都嵯峨芸術大学附属博物館
80．京都精華大学ギャラリーフロール
81．京都造形芸術大学・京都芸術短期大学芸術館
82．同志社大学歴史資料館
新島遺品庫（同志社大学）
83．花園大学歴史博物館
84．立命館大学国際平和ミュージアム
立命館大学末川記念会館
85．池坊短期大学むろまち美術館
86．大阪音楽大学付属楽器博物館
87．大阪産業大学谷岡記念館
88．大谷女子大学博物館
89．関西大学博物館
90．神戸大学百年記念館
神戸大学山口誓子記念館
91．神戸商船大学海事資料館
92．大手前アートセンター（大手前大学）
93．関西学院グリークラブ資料館「Haus Botzingen」（関西学院大学）
94．中内記念館（流通科学大学）
95．大阪青山歴史文学博物館（大阪青山短期大学）　［川西市］
96．奈良教育大学教育資料館
97．天理大学附属天理参考館
98．鳥取女子短期大学絣美術館
99．島根大学汽水域研究センター
100．川崎医科大学現代医学教育博物館　［倉敷市］
101．広島大学医学部医学資料館
102．広島市立大学芸術資料館
103．広島女学院歴史資料館（広島女学院大学）
104．山口大学経済学部商品資料館
山口大学埋蔵文化財資料館
105．梅光女学院大学附属資料館
106．九州大学総合研究博物館
九州大学文学部考古学研究室資料室
107．産業医科大学産業医学資料展示室
108．長崎純心大学博物館
109．熊本大学五高記念館
110．NBU旧宣教師館「キャラハン邸」（日本文理大学）　［大分市］

111．別府大学附属博物館
　　別府大学歴史文化総合研究センター
112．宮崎大学農学部附属農業博物館
113．鹿児島大学総合研究博物館
114．沖縄県立芸術大学芸術資料館
115．琉球大学資料館風樹館

以上のように、大学付属あるいは大学附設博物館を見てくると、本学が構想する「産業考古学館（仮称）」が、他に類を見ない斬新な教育・研究領域をもち、都市の活性化・産業振興策など地域に根ざした新時代の大学博物館建設計画であることは間違いない。

☆

平成18（2006）年度に開館を予定していた大学付属博物館「産業考古学館（仮称）」は、本研究期間である平成14（2002）年度の途中で、「地域経済の厳しさとこれに伴う行財政の厳しさ」に起因する財源難により、「建設休止」の止むなきにいたった。プレス発表したことを勘案すれば、できるだけ早期に建設計画推進を「再開」することが、静岡県の文教政策をより一層飛躍することになると思う。

「産業考古学館（仮称）」はどのようなものか、その課題・施設・活動・運営と建設計画および計画の経緯については、平成15（2003）年3月14日に刊行された『産業考古学館（仮称）整備基本計画報告書』（学校法人静岡文化芸術大学：産業考古学館（仮称）整備基本企画検討委員会監修）を参看いただきたい。（本研究の成果の一部は、同『報告書』にも採り入れられている。）

館「建設休止」により、研究費申請当初の、館建設を前提として構想し着手した研究目的・内容等は、大幅な変更を余儀なくされてしまった。それゆえ、報告したものは共同研究者の視点からの「比較研究」であり、館建設を前提にしていない（研究目的の一部変更）研究報告である。

【注記】

（1）伊東孝『日本の近代化遺産 ― 新しい文化財と地域の活性化―』岩波新書（695）、2000、18～22頁（指定文化財と登録文化財のちがい）を参照されたい。

（2）文化庁ホームページ http://www.bunka.go.jp/（2003-05-07）から採録。

（3）『文化庁月報』No.394／平成13年7月、5頁。

（4）静岡県に関しては、『静岡県の近代化遺産　静岡県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』（編集・静岡県教育委員会文化課、発行・静岡県文化財保存協会）、2000がある（調査期間平成10～11年度、179件を調査・記録）。

（5）理念と運営・学術研究と地域交流の面のみならず集客においても優れているのは平成8（1996）年10月に開館した「滋賀県立琵琶湖博物館」（2001.05.17調査：http://www.lbm.go.jp/ ：『博物館ができるまで』編集・発行同館、1997を参照）。平成13（2001）年6月に開館した大阪商工会議所（設置主体）による「大阪企業家ミュージアム」（2002.01.05見学：大阪産業創造館地下1階）は、企業家精神という“無形のもの”をパネルと映像で展示するだけでなく、人材開発事業（企業家育成講座、大学生の育成セミナー、小中高校生向け交流促進事業）を並行して行なっている。他方、立地条件が悪いのに集客には優れている、平成12年7月に開館した「福井県立恐竜博物館」（2003.08.27見学：http://www.dinosaur.pref.fukui.jp/ ：勝山市）の評価は難しい。それは、[1] 映画「ジュラシックパーク」の近隣効果が消えた後、はたして現在の集客を維持できるだろうか。[2] 二段階入場料金（常設展＋特別展）は、公立博物館としてはトラブルを招く。[3] 学芸員の顔が見えない、等の理由である。

（6）種田明「大学博物館・“産業考古学館”（仮称）の設立」（本稿Ⅰ－1：割注※※参照）。また、種田「国際会議報告TICCIH2000UK」（『大阪の産業記念物』24／2001（「大阪の産業記念物」刊行会編／桃山学院大学）、p.14～16）では、産業博物館の国際的な位置づけを行なった。